

デリー・サルタナト期のシャイフルイスラーム —— サルタナト政権のスーフィー登用に関する一考察 ——

二宮文子

はじめに

デリー・サルタナト期のインドではスーフィーの権威が非常に重視されており、一部の歴史書では、スルターンの治世の安定もスーフィーの祝福（バラカ）によるものとされている [Hardy 1997: 34, 116, 128]。また、未来のスルターンがスーフィーによって王座に就くことを予言される、という逸話も数多い。スーフィーと政治権力はこの時期の主要な権威の源であり、特にトゥグルク朝期までの両者の関係は、多くの研究者の注目を集めてきた¹⁾。この点についての古典的見解は Nizami のものであり、スーフィーはスルターンとの面会や土地の寄進などの経済援助を受けること、カーディーなどの官職 (šugl) に就くことといった政権との関わりを避けるのが標準ないし理想であるとする。Nizami はまた、Quṭb al-Dīn Baḥṭiyār²⁾、Nizām al-Dīn Awliyā³⁾ を始めとするチシュティーヤのスーフィーはその理想を保ったのに対し [Nizami 2002: 255–263]、Bahā al-Dīn Zakariyā⁴⁾、Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ⁵⁾ を始めとするスフラワルディーヤは、政権を宗教面から導くという異なった思想的立場から、政権が提供する官職や土地の寄進を受け、政権との関係を持つことを選択

1) スーフィーによる政権の権威付けを扱った研究としては Digby 2003、スーフィーとスルターンの間の権威を巡る緊張関係を扱った研究としては Digby 1990, Kumar 2000 がある。

2) インドのチシュティーヤの祖とみなされる Mu'in al-Dīn (1236 年没) のハリーフア。デリーで活動した。1235 年没 [Farooqi 2003 a: 9–13; Nizami 2002: 202–204; Rizvi 1983 a: 133–138]。

3) Farid al-Dīn Ganj Šakar (注 36 参照) のハリーフア。デリーで活動し、多くのハリーフアや弟子を養成した。1325 年没 [Farooqi 2003 a: 19–25; Farooqi 2003 b: 1–13; Nizami 2002: 13–51, 87–90; Rizvi 1983 a: 154–175]。

4) Šihāb al-Dīn Abū Ḥafṣ 'Umar Suhrawardī (1145–1234) のハリーフアで、ムルタン・スフラワルディーヤの祖。1262 年没 [Khan 1983: 189–190; Nizami 2002: 238–240; Rizvi 1983 a: 191–194; Siddiqui 1998: 19–34]。

5) Bahā al-Dīn Zakariyā の孫で、当時のムルタン・スフラワルディーヤの中心人物であった。1335 年没 [Khan 1983: 215; Rizvi 1983 a: 210–215; Siddiqui 1998: 36–39]。

したとしている [Nizami 2002: 263-272]。これはスーフィー側、特にデリー・チシュティヤーの主張にほぼ全面的に依拠した見解であり、現在は複数の視点から批判が加えられている。Zilli は、スーフィーと政権との関係とはスーフィーとスルターンの個人的な関係に留まるものではなく、それぞれを支える集団同士の関係でもあることに注目し、ハルジー朝、特に Sultān 'Alā al-Dīn (1296-1316) の時代以降、王子 Ḥiḍr Ḥān, Šādī Ḥān を始めとする政権関係者が大量に Niẓām al-Dīn Awliyā に弟子入りして経済援助を行ったことを指摘し、これによって Sultān 'Alā al-Dīn 政権とデリー・チシュティヤーの間に良好な関係が生じた、とする [Zilli 1998: 48-50, 53-57; Zilli 2003: 61-71]。これは当時の政治状況の理解としてより妥当なものであり、筆者も同様の視点から、Niẓām al-Dīn Awliyā が支持者を通して宮廷内の権力闘争に関わっていた可能性を指摘したことがある [二宮 2003: 13-19]。また、土地の寄進に対するチシュティヤーとスフラワルディヤーの態度の違いに関しては、政治状況が比較的安定しており食料や金銭などの一時的な寄進に頼ることが可能であったデリーと、常に中央アジアからの侵入者に脅かされており、ハーンカーの自給自足が要求されたマルチンという土地柄の違いによるものとする説が Digby によって提示されている [Digby 2003: 244-245]。当時の社会状況というより広い視座に基づく Digby 説は、スーフィーの思想的立場のみに注目した Nizami 説より説得力がある⁶⁾。

このように、スーフィーと政権との関係の分析は、専ら政権（スルターン）と著名なスーフィーの個人レベルでの行動に立脚する Nizami 説から、当時の社会・政治状況をも視野に入れた分析を目指す方向へ移っている。本稿では、社会・政治状況に基づくスーフィーと政権の関係分析の一環として、政権による、スーフィーの官職への登用を扱う。そもそもこの点に関しては、スーフィー側の官職に対する態度のみが問題とされる傾向にあり、政権側が誰に、どのような理由で官職を提供したか、という政権側の政治的意図はほとんど顧みられてこなかった⁷⁾。これは、官職への登用を扱う態度としては明らかに片手落ちである。Zilli は、Sultān Muḥammad (1324/5-51) が強制的にスーフィーに官職を押し付けた、とする Nizami 説に疑問を呈し、Sultān Muḥammad がスーフィーに要求したのは政権への「moral support」であり、官職を提供したわけではない、と考える [Zilli 2003: 85-86]。この解釈は、政権の正確な狙いを汲み取ろうとしている点において、スーフィーの態度のみ

6) その他、経済援助については、チシュティヤーのスーフィーの集会所（ジャマーアト・ハーナ）や聖者廟（ダルガー）はスルターンや支配層によって建設、寄進されたものと推察し、一括りにチシュティヤーが政権の経済援助を断ったとは言えないとする荒の見解がある [荒 1989: 227-231, 243-244]。

7) 官職を拒否するのがチシュティヤーの伝統である、という Nizami 説に対しては、それに従う必要があったのは集団の中核を成すシャイフやハリーフエなどであり、その他の入門者が官職に就くのは止められていなかったこと、また、ハルジー朝、トゥグルク朝期に官職に就いていたのはむしろチシュティヤーの構成員であることが既に指摘されている [Zilli 2003: 82-85]。

を問題とする見方から一歩進んだものではある。しかし、Zilli は、Sulṭān Muḥammad とチシュティーヤの関係は Nizami や M. Habib が主張したほど険悪なものではなかったということ論じる過程でこの問題を扱っており、スーフィーの官職への登用における政権側の意図についてさらに突っ込んだ議論は行われていない。そこで本稿では、スーフィーを登用した政権側の政治的意図の理解を目的として、デリー・サルタナト初期からトゥグルク朝期までを通して活動が認められるシャイフルイスラーム (ṣayḥ al-Islām) の人選について検討する。この時期のシャイフルイスラームの就任者に関するデータは比較的まとまって取れ、その大半はスーフィーやスーフィーの子孫⁸⁾であるため、分析材料として適切と判断される。最初に、官職の性質を理解するためにシャイフルイスラームの職能について整理し、その後デリーのシャイフルイスラーム、地方のシャイフルイスラームそれぞれの人選について見ていきたい。これらの分析を通して、当時の社会・政治状況に応じてスーフィーを登用した政権側の政治的意図を明らかにできると考える。

I シャイフルイスラームの職能

デリー・サルタナト期のシャイフルイスラームの職能や活動をある程度まとまった形で扱っているのは Rizvi と Qureshi, Nizami である [Qureshi 1958: 190-191; Nizami 2002: 170-176; Rizvi 1983 a: 192]。Rizvi は、Bahā al-Dīn Zakariyā の例から、シャイフルイスラームは政権から経済援助を受けていたものの、官職というよりは名誉号に近いものであったとしている。一方 Qureshi は、シャイフルイスラームはスーフィーとファキール(貧者)の経済援助の差配、ハーンカーや聖者廟のワクフの管理を行っていた官職であるとし、また IB の記述を基にシャイフルイスラームはサドルの下にあったとしている。Nizami は Kramer と Qureshi に基づき、シャイフルイスラームは政権から経済援助を受けているスーフィーを世話する官職で、専らウラマーが就いたとする一方⁹⁾、Bahā al-Dīn Zakariyā の例は名誉号であるとしているが、その根拠は明らかではない¹⁰⁾。確かにシャイフルイス

8) スーフィーの子孫であることは、本人がスーフィーであることと必ずしもイコールではないが、政権側にとっては(恐らく大部分の人々にとっても)、スーフィーの子孫が、祖先の権威を継承する人物であるという点が重要だったと考えられるため、本稿ではスーフィーとその子孫を同列に論じる。

9) Nizami は冒頭に述べたスーフィーの理想像に基づき、政権に雇用されたか否かという点をウラマーとスーフィーの区分の基準とする傾向にある [Nizami 2002: 169-170, 272-276]。しかし、史料内に見える「ウラマー/スーフィー」という区分の基準は、活動の基礎となる学術や実践法(法学・議論/神秘学・修行)、思想態度(教条主義/柔軟)、生活の基盤(政権に雇用される/自活ないし恒常的でない援助)等文脈によって様々に異なっており、一概に論じることはできない。また、政権に雇用されている「ウラマー」が必ずしも教条主義ではないというように、1つの基準が別の基準を必然的に伴うわけではないという点にも留意すべきである。

10) 様々な点で Nizami を批判する Zilli も、この点は同様の見解を取っている [Zilli 2003: 82]。

ラームという語はウラマーやスーフィーへの尊称として一般的に用いられているが¹¹⁾、ṬNを始めとする多くの史料において「官職」を意味する *manṣab* がシャイフルイスラームに対して用いられており、Bahā al-Dīn Zakariyā の例のみをもとに名誉号とする Rizvi の説は受け入れられない。また、Kramer はインドのシャイフルイスラームにはほとんど触れていないので、Nizami が依拠したのは事実上 Qureshi のみである。Qureshi の記述の基になっているのは、マムルーク朝で書かれた *Masālik al-abṣār* の「シャイフルイスラーム長 (*ṣayḥ al-Islām al-mamālik*)、すなわち [エジプトでの] 大シャイフ (*ṣayḥ al-ṣuyūḥ*) は、サドル長 (*ṣadr-i jahān*) と同額の給金を受けている [Zaki 1981: Masalik 25-26] という記述である。マムルーク朝の大シャイフは al-Nāṣiriya のような主要なハーンカーの長で、管轄下のハーンカーや施設に属する人々に対する裁判権を持ち、ハーンカーのワクフ管理者となることも多かった [Escovitz 1984: 206-209; Fernandes 1988: 51-52]。インドのシャイフルイスラーム長がエジプトの大シャイフに相当するという解釈は職能の面での類似からと推察される。シャイフルイスラーム長という官職名はインド史料にも見られ、年金 (*idrār*) やワクフを管理していたことが分かる [SA: 196; IM: 36-37]。その他にも、シャイフルイスラームがハーンカーを委託されたという記述や [J'U: 257, 264; TM: 153 b]、ハーンカーから支給される生活援助や食事の差配をシャイフルイスラームに求める書簡があり [IM: 40]、シャイフルイスラームがハーンカーの管理に関わっていたことは間違いない。ただしインド史料の記述を見る限り、シャイフルイスラームが管理していたのは主に財政、すなわちハーンカーのワクフやハーンカーから支給される年金のようで、マムルーク朝のように、ハーンカーに所属するスーフィーの裁判権まで持っていたかは分からない。なお、トゥグルク朝期にハーンカーを管理していたのはシャイフルイスラームだけではなく、IB では外来のサイドの収入源の一部としてザーウィヤの管理が挙げられている¹²⁾ [IB: 403-404; 家島 5: 322]。

前段落で扱ったシャイフルイスラームの職能はトゥグルク朝期の情報に基づいており、これら全てがデリー・サルタナト初期からのものと言えるか多少疑問である。特に、サルタナト初期のインドにおいて、ハーンカーはそれほど一般的な施設ではなかった¹³⁾。実際、史料

11) シャイフルイスラームという尊称は、スーフィーの著作では、Ando 1994 が扱ったジャーム、ミフナ、ヘラートの3ハーンカーの創始者や、著者であるスーフィーの直接の師に付される場合が多い。全体として、この尊称は時代が下るにつれて、より多くの人物に対して用いられるようになる。

12) マムルーク朝に関する研究では、ハーンカー、リバート、ザーウィヤといった施設には区別があったとされているが [Fernandes 1988: 10-19]、少なくともインドに関する IB の記述からはそのような区別は読み取れない。インド史料にはリバート、ザーウィヤと言う語はあまり見られず、ハーンカーと似た性質を持つスーフィー関連の施設はジャマアト・ハーナである [Nizami 2002: 220-228]。

13) Quṭb al-Dīn Baḥṭiyār など、初期の著名なスーフィーにはハーンカーを持っていなかった者も

から確認できるハルジー朝期以前のシャイフルイスラームの活動は、Sulṭān iltutmiš (1211–36) 時代のシャイフルイスラーム Najm al-Dīn Ṣuġrā による、デリーに移住して来たスーフィーへの住居の斡旋などの世話とスーフィーの動向の監視、とでも要約できる例のみである¹⁴⁾。つまり、この時点でシャイフルイスラームが何かしらスーフィーの管理に関わっていたことは確認できるが、ハーンカーとの関係は不明である。しかし、14世紀初頭にはシャイフルイスラームとハーンカーの関係が成立していたようで、FFの708/1309年の講話の中には「(Niṣām al-Dīn Awliyā は) 昔、シャイフルイスラーム職の仕事望み¹⁵⁾、(自らの敬虔さを見せつけるために) 金曜モスクで毎晩徹夜して祈っていた人物¹⁶⁾について話された。この間にハージャは祝福された目に涙を溜め、こう言われた『まずシャイフルイスラーム職を、そしてハーンカーを、その後自我を燃やせ』[FF: 14]』という記述が見える¹⁷⁾。恐らく13世紀後半のインドでスーフィーが構えるハーンカーの数が増加し、またハーンカーという定点を通したスーフィーの管理が簡便だったため、一部のハーンカーがシャイフルイスラームの管轄下に入ったのではないかと考えられる。

次に、Rizvi や Nizami が名誉号であるとした Bahā al-Dīn Zakariyā の例について多少の検討を加えたい。まず、Bahā al-Dīn Zakariyā が任命されたシャイフルイスラームが官職ではなく、実質的な職務や権限を備えない名誉号だと決定できる材料は、史料の中には存在しない。逆に、トゥグルク朝期までのデリー・サルタナトで、政権が誰かをシャイフルイ

多い [Digby 2003: 243]。Sulṭān iltutmiš 時代に建設されたとされるムルタンの Bahā al-Dīn Zakariyā ハーンカーはインド最初期の例である。なお、ハーンカーは存命中のスーフィーが構える他、スルターン等の墓廟に併設される例などが見受けられる [Futūḥāt: 29]。

14) この例は、16世紀初頭に書かれた S'A に拠るものであり、Nizami が詳しく紹介している [S'A: 125 b–129 a; Nizami 2002: 174–176]。ただし、Nizami は Najm al-Dīn Ṣuġrā に著しく批判的で、その活動の性質について冷静な記述がなされているとは言いがたい。なお、763/1361年に書かれた上奏書では、Sulṭān Mu'izz al-Dīn Sām Ġūrī (1206年没) がムルタンの集会モスクに行ったワクフの管理人 (mutawalli) がシャイフルイスラームとされているが [IM: 37–39; Khan 1983: 317–318]、これは後の時代にシャイフルイスラームに委ねられた可能性もあるため、厳密にはサルタナト初期の例とは言えないだろう。

15) Faruqi は「人々がシャイフルイスラームの称号を与えてくれることを望んで」と訳しているが、筆者の参照したテキスト「bi-umid-i ṣuġl-i ṣayḥ-i Islāmi」をそのように訳するのは難しい [Faruqi 1996: 104]。FFを参照したと考えられる SA では、この部分は筆者のテキストとほぼ同様である [SA: 550]。

16) Faruqi 訳ではこの人物は「ダマスカスの人」となっている [Faruqi 1996: 104]。

17) 通説では Bahā al-Dīn Zakariyā の息子 Ṣadr al-Dīn の没年は 1285/6年であるが [Nizami 2002: 240; Rizvi 1983 a: 203; Siddiqui 1998: 26]、Ā'in と GA は Ṣadr al-Dīn の没年を 709/1309年としており、ムルタンの地方史として信頼性の高い Khan 1983 はこの説を採用している [Ā'in: 215; GA: 69; Khan 1983: 12, 215]。後述するように Bahā al-Dīn Zakariyā の子孫は、既にこの時代からムルタンで代々シャイフルイスラーム職に就いていたと考えられるので、FF内の発言は、Ṣadr al-Dīn の晩年に生じた、ムルタンのシャイフルイスラーム職を巡る揉め事に対する反応ということもあり得る。

スラームにしたと史料に記されている場合ほぼ間違いなく官職を指し、名誉号シャイフルイスラームを政権が誰かに与えたと判断できるケースは管見の限り存在しない。従って、Bahā al-Dīn Zakariyā のシャイフルイスラームとしての活動の実態は不明だが、彼は官職に任じられたと判断しておくのが妥当であろう。逸話・伝説の類いを除くと Bahā al-Dīn Zakariyā がデリーで活動したという記録はなく¹⁸⁾、彼はムルタンのシャイフルイスラームであったと考えられる。また、S'A では、15 世紀末にムルタンの Bahā al-Dīn Zakariyā ハーンカーを管理していた彼の子孫もシャイフルイスラームと呼ばれており、その地位は Bahā al-Dīn Zakariyā から、つまり、デリー・サルタナト初期から 15 世紀のランガ族の支配期まで、政権の交代にも関わらず世襲で受け継がれてきたとされている [S'A: 29 a; Ninomiya 2006: 189, 195]。この記述から、15 世紀末には Bahā al-Dīn Zakariyā ハーンカーの管理者の地位がシャイフルイスラームと呼ばれていたと推察される。さらに、デリー・サルタナト期を通して、Bahā al-Dīn Zakariyā の子孫以外の人物がムルタンのシャイフルイスラームになった例は見られない¹⁹⁾。これらの点から、「ムルタンのシャイフルイスラーム（スーフィーとハーンカーの管理者）」と「Bahā al-Dīn Zakariyā ハーンカーの管理者」は極めて早い時期、恐らく Bahā al-Dīn Zakariyā の生前から同一視され、後者もシャイフルイスラームと呼ばれるようになっていた可能性が高い²⁰⁾。

このように、シャイフルイスラームはサルタナト初期からデリーとムルタンに存在していたが、ハルジー朝期にはそれらに加えてアワド [FF: 35; Faruqi 1996: 159; SA: 275]、トゥグルク朝期にはさらにシンド [J'U: 257, 264; TM: 153 b; Digby 1990: 78 n 9]、サトガーオン²¹⁾などにもシャイフルイスラームの存在が確認され、主要な地域毎にシャイフルイスラームが置かれていたようである。これらのシャイフルイスラームは 1 人で複数のハーンカーを管理することもあり、Sayyid Jalāl al-Dīn Buḥārī²²⁾ はシンドのシャイフルイスラームとして、スィーフスターンにある 40 のハーンカーの管理を委託された [J'U: 257, 264; Digby 1990: 78 n 9]。Qureshi が指摘しているように、IB にはシャイフルイスラームがサ

18) S'A が *Ṭarab al-majālis* なる作品に記されていると主張する「Bahā al-Dīn Zakariyā のデリー訪問に関する記述」は、Rampur 所蔵写本には見られない [S'A: 18 b-19 a]。

19) Islam は、ウチュ出身のスーフィー Sayyid Jalāl al-Dīn Ḥusayn Buḥārī が 1341 年頃にムルタンのシャイフルイスラームになったと考えているが [Islam 2002: 295-296]、彼がムルタンのシャイフルイスラームであったとする同時代史料は管見の限り存在しない。おそらく Islam は、Jalāl al-Dīn Ḥusayn Buḥārī が提供されたシンドのシャイフルイスラーム職とムルタンのそれを混同しているのではないかと考えられる [J'U: 257, 264; TM: 153 b; Digby 1990: 78 n 9]。

20) あるいは、両者が最初から同一のものだった可能性もある。注 11 で触れたように、中央アジアにおいては、ジャーム、ミフナ、ヘラートのハーンカーの長の地位が政権によって「シャイフルイスラーム」という官職として承認されていた [Ando 1994: 266; 安藤 1994: 10]。

21) 現在のチャッゴン。SA テキストでは Satgānūh [SA: 307; GA: 77]。

22) 注 19 参照。

ドル長の副官 (nā'ib) と表現されている箇所があるが [IB: 441-442; 家島 5 : 349], この例が官職名か単なる称号かは明確ではない²³⁾。既に述べたように最高位のサドルとシャイフルイスラームの給金は同額とされており、全てのシャイフルイスラームが行政組織の中でサドルの下にあったと断ずるのは危険であろう。

先に述べたシャイフルイスラーム長²⁴⁾という官職の存在が確認できるのは Sulṭān Muḥammad 以降のトゥグルク朝期のみで、各地のシャイフルイスラームとの関係は現在参照できる史料からは明らかではない。ただし、Sulṭān Firūz (1351-88) 時代のシャイフルイスラーム長であったムルタン・スフラワルディーヤのṢadr al-Dīn Ḥalīm²⁵⁾がデリーに住居を持ち [J'U: 668], Niẓām al-Dīn Awliyā ハーンカーからの年金の支払いを指図するように求められていることから見て [IM: 40], シャイフルイスラーム長はデリーを中心として活動しており、その権限は所属する派を跨がって複数のハーンカーに及んでいたと考えられる。なお、TFŠa はシャイフルイスラームṢadr al-Dīn Ḥalīm が宮廷を訪問する際の Sulṭān Firūz の対応を細かく記しており²⁶⁾、その記述はシャイフルイスラームと宮廷の間にある種の距離があったことを伺わせる。

デリー・サルタナト期のシャイフルイスラームは、スーフィーの年金やハーンカーのワクフなど、主に財政面でスーフィーやハーンカーを管理する官職で、首都デリー以外に、サルタナト支配下にある主要な地域にも置かれていた。また、トゥグルク朝期にはデリーを管轄下におくシャイフルイスラーム長が設置されていた。以上の点を確認し、次節ではハルジー朝期までのデリーのシャイフルイスラームと、トゥグルク朝期のシャイフルイスラーム長の人選を扱いたい。

23) 家島は malik al-'ulamā の称号ないし人名という可能性を挙げている [家島 5 : 175, n 213, 190, n 210]。

24) インドの歴史書にシャイフルイスラーム長という官職名が登場することは稀だが、トゥグルク朝期の史料で特に地域を断らずシャイフルイスラームと記されている場合、デリーで活動していたシャイフルイスラーム長を指していると判断できるケースが多い。

25) Bahā al-Dīn Zakariyā の子孫で、Sulṭān Firūz によってシャイフルイスラーム長に任じられた。TMS̄ や TSM では彼が任じられた地位はただシャイフルイスラームと記されているが、管轄地がデリーであることから、シャイフルイスラーム長を指していると考えられる [TFŠa: 96; TMS̄: 124; TSM: 50]。Ṣadr al-Dīn Ḥalīm については拙稿も参照されたい [Ninomiya 2006: 192-193]。

26) シャイフルイスラームの訪問の際、Sulṭān Firūz はカーディーヤやマリクを従えて立って彼を迎え、挨拶と歓談の後に食事が供されていた。このような面会時にシャイフルイスラームは口頭ではなく置き手紙でスルターンへの要求を伝え、手紙を受け取ったスルターンはマリクに対処させていたという [TFŠa: 286-287]。

II デリーにおけるシャイフルイスラームの人選

首都デリーで活動したシャイフルイスラームとシャイフルイスラーム長の人選に関しては、一部欠落があるものの、デリー・サルタナト初期からトゥグルク朝期を通して情報が得られる。以下、時代順にシャイフルイスラームの人選を追いながら、その背景にあった事情を分析していく。

デリー・サルタナト初期のデリーのシャイフルイスラームとしては、先に触れた Najm al-Dīn Ṣuġrā と [FF: 80; Faruqi 1996: 287; SA: 54, 398, 575, 581; S'A: 10 a, 37 a, 125 b-], Jalāl al-Dīn Muḥammad Baṣṭāmī²⁷⁾ [S'A: 36'a, 37 a], Sayyid Quṭb al-Dīn [ṬN: 467, 492; TFŠb: 111, 348], Jamāl al-Dīn Baṣṭāmī [FF: 6; Faruqi 1996: 80; ṬN: 490, 495] が挙げられる²⁸⁾。このうち Najm al-Dīn Ṣuġrā はフィルドゥースィーヤに属していたことが分かるが²⁹⁾、それ以外の人物については特定のシルスィラへの繋がりには確認されない。

この中で注目されるのは Sayyid Quṭb al-Dīn の例である。この人物は、639/1242年, Sultān Mu'izz al-Dīn (1240-42) によって反乱軍に対し使者として派遣されるも逆に反乱軍をデリーに導いてきたり [ṬN: 467; TŠJ: 13; Habib 1992: 249], 655/1257年, 当時のムルタンの支配者がデリーに攻め上ってきた際に Qāḍī Šams al-Dīn Bahrāyīcī とともにムルタン軍に支持を表明する手紙を書いたり [ṬN: 492-493; Habib 1992: 268-269], デリーのスルターンたちに対する裏切りともいえる行為を繰り返した。それにも関わらず、彼は Sultān Balaban (1266-87) 時代まで、断続的にはあるがデリーのシャイフルイスラームを務め続けた [TFŠb: 111]。この例は、当時のデリーのシャイフルイスラームの人選に関して、デリー・サルタナト政権の意向とは別の力が働いており、政権がほとんど選択権を持っていなかったことを示唆している。この「別の力」は、デリー市民の意向である可能性が高い。デリー市民の集団としての重要性は、Sultān Naṣīr al-Dīn (1246-66) の即位時に「マリクやアミール、サドル、貴人 (kubrā), サイド, ウラマーたち」向けの謁

27) 一部の S'A テキストでは、この人物の名前は Jalāl al-Dīn ではなく Jamāl al-Dīn になっているようで、この人物は ṬN や FF に登場する Jamāl al-Dīn Baṣṭāmī と同一視されることが多い [Faruqi 1996: 129; Nizami 2002: 203]。しかし、Nizami も指摘しているように、これらの史料に記されている両者の没年は明らかに異なる [Nizami 2002: 174]。筆者が参照した S'A 写本では名前が違うので、両者は別人と解釈しておく [S'A: 36'a, 37 a]。

28) AA と MA では Sayyid Nūr al-Dīn Mubārak Ġaznawī が Sultān İltutmīš 時代のシャイフルイスラームであったとされているが [AA: 34; MA: 184 b], より時代が近い FF, TFŠb, SA ではシャイフルイスラームとは呼ばれていない [FF: 106, 131; Faruqi 1996: 353, 421; TFŠb: 44; SA: 61]。

29) フィルドゥースィーヤの伝記では、彼は Najm al-Dīn Kubrā と呼ばれているようである [Digby 2003: 245]。

見の翌日に、デリー一般市民とのバイアの儀式が行われたことから確認できる [ṬN: 478]。1257年にムルタン軍に支持を表明したのは Sayyid Quṭb al-Dīn と Qāḍī Šams al-Dīn Bahrāyīcī に代表される集団であったが、彼等は「(反乱軍を) デリー (ḥaḍrat) に招き、諸門を彼等に預けるために (手紙を送り)、デリー市 (šahr) 内で全ての人にこの計画と同意に対する誓い (bai'at) を行い、約束をしていた [ṬN: 492]」。この記述から、サルタナト政権とデリー市の人々の間には一定の距離があり、Sayyid Quṭb al-Dīn らが反政権派デリー市民の中心となっていたことが伺われる。彼等の企てを知った Ulug̃ Hān (後の Sulṭān Balaban) は、デリー近郊にイクターを持っている者をデリーから自らのイクターに下がらせ、Sayyid Quṭb al-Dīn もデリーから離れた³⁰⁾ [ṬN: 492]。既に述べたように、彼は Sulṭān Balaban 時代にシャイフルイスラームに復帰している。一方、Sulṭān Balaban の反対派と繋がりを持っていたと考えられる Qāḍī Šams al-Dīn Bahrāyīcī³¹⁾ のその後の消息は不明である。自らの反対勢力の封じ込めに力を注いだ Sulṭān Balaban が [Jackson 1999: 76-78]、明らかな敵対行為を取った Sayyid Quṭb al-Dīn に対して首都からの一時的な追放以上の措置を取り得なかったのは、彼がデリー市民に支持されていたからではないかと考えられる³²⁾。

これからしばらくの間、シャイフルイスラームの人選に関する情報は途絶える。次に分かるのは Sulṭān 'Alā al-Dīn の即位直後の人事で、「サイド・アジャッル職 (sayyid-i ajalli)、シャイフルイスラーム職 (šayḥ al-Islāmi)、ハティーブ (説教師) 職 (ḥiṭābat) が昔からのサイド・アジャッル、シャイフルイスラーム、ハティーブに与えられた [TFŠb: 247]」。この「昔からのシャイフルイスラーム」が誰なのかは分からないが、この時点では Sulṭān 'Alā al-Dīn はその人選に特にイニシアティブを發揮していなかったようである。しかし、彼の治世にはムルタン・スフラワルディーヤの Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ が2回デリーを訪れたとされており³³⁾ [S'A: 109 b]、これがトゥグルク朝期における彼の子孫のシャイフルイスラーム長登用へのきっかけになったとも考えられる。Rukn al-

30) なお、ṬN では Sayyid Quṭb al-Dīn のイクターの所在地は明示されていないが、TFŠb で彼は「バダーウンのカーディー達の祖」と呼ばれており [TFŠb: 348]、彼のイクターはバダーウンかその近郊にあったのではないかと考えられる。

31) 彼は、Sulṭān Balaban のライバルであった 'Imād al-Dīn Rayḥān によって大カーディー (qāḍī-yi mamālik) に任じられている [ṬN: 487]。

32) Sulṭān Balaban 時代に関する情報の多くを、自らの先祖など当時のデリーの状況を知る人々を通して得たと考えられる Dīyā al-Dīn Baranī は、Sayyid Quṭb al-Dīn を知識人として賞賛している [TFŠb: 111, 348]。

33) Firishta は Sulṭān 'Alā al-Dīn が Rukn al-Dīn をシャイフルイスラームにしたと伝えているが [Khan 1983: 215]、任命地がムルタンかデリーかははっきりしない。いずれにせよ、Sulṭān 'Alā al-Dīn 治世における Rukn al-Dīn のデリー訪問のうち1回は先に扱った1309年前後に生じた可能性が高い。

Din Abū al-Faṭḥはさらに Sulṭān Quṭb al-Dīn (1316-20) 時代にもデリーに招かれ³⁴⁾, それを Niẓām al-Dīn Awliyā を取り巻く人々に大きな波紋を与えた様子は, SA が両者の出会いの様子を詳細に記録していることから伺うことができる³⁵⁾ [TFŠb: 396; SA: 135-141]。SA の記述を見る限り, ハルジー朝末期からトゥグルク朝初期にかけての Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ のデリー滞在はある程度の期間に及んでいたと考えられる。特に 1325 年前後にはデリーに長期滞在していたようで, 彼は晩年の Niẓām al-Dīn Awliyā を見舞い [SA: 140], さらに Sulṭān Ġiyāṭ al-Dīn (1320-24/5) が死亡した場に同席していた [IB: 213; 家島 5: 27; S'A: 110 b; GA: 50]。史料の中では Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ の滞在の目的は明示されていないが, この時期にはシャイフルイスラームとしてデリーで活動していた可能性もある。また, デリーにムルタンの著名なスーフィー・シャイフを呼び寄せるという行為は, デリー政権にとってある種象徴的な意味を持っていたと考えられる。ムルタンは元来独立勢力で, Sulṭān Ilutmiš の征服後もムルタンの支配者がデリー政権に挑戦するなど, サルタナトからの独立傾向を持った地であった。このような状態では, 同地のシャイフをデリーに呼び寄せるなどということは極めて難しかっただろう。しかし, Sulṭān Balaban, Sulṭān Jalāl al-Dīn (1290-96) らがムルタンに王子を任じて対モンゴル戦に当たさせた結果, デリー政権のムルタン支配は徐々に強化されていったと考えられる。ムルタンのシャイフ Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ の長期のデリー滞在は, かつて独立勢力であったムルタンが完全にデリー政権の支配下に入った証でもあったのである。

続いてトゥグルク朝期のシャイフルイスラーム長の人選であるが, Sulṭān Muḥammad 時代には, アジョーダンの Farīd al-Dīn Ganj Šakar³⁶⁾ の子孫が世襲でシャイフルイスラーム長に任じられていた³⁷⁾。Farīd al-Dīn の孫にしてサッジャーダ・ネシーンの 'Alā al-Dīn Mawj Daryā (1281-1334) は Sulṭān Muḥammad と Sulṭān Fīrūz の師であった³⁸⁾

34) Sulṭān Quṭb al-Dīn の師は Dīyā al-Dīn Rūmī というスフラワルディーヤのスーフィーであった [AA: 84; S'A: 95 b; TFŠb: 394]。この時期に, シルスィラを共有するスーフィー達がどの程度の仲間意識を持っていたのかは明らかではないが, 彼が Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ と同じスフラワルディーヤに属しているという点は興味深い。なお, S'A や AA は Dīyā al-Dīn Rūmī を Šihāb al-Dīn Abū Ḥafṣ Suhrawardī の弟子ないしハリーフアとしているが, 年代から言って直弟子とは考えられない。

35) Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ は, Sulṭān Quṭb al-Dīn の 4 年の治世の間に 3 回デリーを訪問したとされる [S'A: 109 b]。SA のこの部分は Rizvi によってほぼ全訳されている [Rizvi 1983 a: 211-212]。Rizvi は Rukn al-Dīn Abū al-Faṭḥ が Niẓām al-Dīn Awliyā に会うためにデリーを訪問したとしているが, SA の記述を見る限り彼等の出会いはごく短いものがほとんどで, それだけのためにムルタンからデリーに出てきたとは考えにくい。

36) Quṭb al-Dīn Baḥṭiyār (注 2 参照) のハリーフア。アジョーダンで活動した。1265 年没 [Farooqi 2003 a: 13-19; Nizami 2002: 205-206; Rizvi 1983 a: 116-125]。

37) シャイフルイスラーム職の世襲は, デリー・サルタナト最初期から見られる [TN: 495]。

38) 'Alā al-Dīn Mawj Daryā とトゥグルク朝のスルターン達の親密な関係については Digby 1990, Eaton 2003 を参照されたい [Digby 1990: 76-77, 81, n 63; Eaton 2003: 266-268]。

[IB: 308-309; 家島 4: 308-309; SA: 196; TFŠa: 371; AA: 108]。彼には 2 人の息子がおり、長男 Mu'izz al-Dīn の家系がサッジャーダ・ネシーンの地位を継承したようである³⁹⁾ [SA: 196-197]。次男 'Alam al-Dīn は Sultān Muḥammad 下でシャイフルイスラーム長 (šayḥ al-Islām-i mamlakat-i Hindūstān) になり [SA: 196]、その息子 Maḥzar al-Dīn は父の死後その地位を継いだ [SA: 197]。一方、Sultān Firūz は 753/1352 年に Bahā al-Dīn Zakariyā の子孫 Šadr al-Dīn Ḥalīm をシャイフルイスラーム長に任じている⁴⁰⁾。彼は 1380 年頃にもデリーに滞在しており [J'U: 218, 668]、かなりの期間シャイフルイスラーム長であったと考えられる。彼以降のデリーのシャイフルイスラームについて分かることは非常に少なく、また情報源も後世のもののみになるため、分析の対象にはしない⁴¹⁾。

一見して分かる通り、トゥグルク朝期のデリーのシャイフルイスラーム (長) の人選は政権の交代によってその傾向が変わっている。その流れは、ハルジー朝末期からトゥグルク朝初期に Rukn al-Dīn Abū al-Fatḥ がデリーでシャイフルイスラームだったと仮定すると、ムルタン・スフラワルディーヤ (Sultān Ġiyāṭ al-Dīn) → アジョーダン・チシュティーヤ (Sultān Muḥammad) → 再びムルタン・スフラワルディーヤ (Sultān Firūz) となる。ここで注目されるのは、デリーを拠点としたスーフィーが任命された例が 1 つもないという点である。遡ってハルジー朝期にも、デリーで非常に有力であった Niẓām al-Dīn Awliyā は弟子や支持者によってシャイフルイスラームという尊称で呼ばれているものの、政権によってシャイフルイスラーム職に任じられたという類いの情報は全く残されていない。そもそも Sultān 'Alā al-Dīn と Niẓām al-Dīn Awliyā の関係は始めは決して良好とは言えず、複数の人々が集まって話し合いをすることを非常に警戒していた Sultān 'Alā al-Dīn は、Niẓām al-Dīn Awliyā の元に人々が通っているという噂を聞いて密偵を派遣していたという [QA: 73-74]。Sultān 'Alā al-Dīn のこの警戒心の強さは、ただ単に彼個人の性格によるものではなかった。デリー・サルタナト初期に見られた政権とデリー市民の乖離はハルジー朝期にも存在し続けており、Sultān Jalāl al-Dīn は彼等の反感のために即位後しばらくデリーに入ることができず [TFŠb: 172-173; TŞJ: 26; Jackson 1999: 58-59]、また Sultān 'Alā al-Dīn は 700/1301 年のデリーにおける反乱後デリー郊外に居を構え、703/1303 年には新都スィーリーを建設した [TFŠb: 283; Jackson 1999: 59]。このような

39) IB は Mu'izz al-Dīn が 'Alā al-Dīn のシャイフ位 (šayāḥa) を継いだとしているが、これはサッジャーダ・ネシーンの地位のことを指すのであろう [IB: 136; 家島 4: 309]。Mu'izz al-Dīn は後に Sultān Muḥammad によってグジャラートに派遣され、同地で起こった反乱の際に死亡した [SA: 196; TFŠb: 508, 512-518]。

40) 注 25 参照。

41) 16 世紀に Muḥammad Čišṭi によって書かれた MH では、彼の先祖がスルターン (名称不詳) によってデリーのシャイフルイスラームに任じられ、また Firūz Bahmanī (1397-1422) によってデカンに招かれたとされている [MH: ASB 43 a, MAL 21 b]。Muḥammad Čišṭi については Rizvi を参照されたい [Rizvi 1983 b: 295-296]。

状況はトゥグルク朝期にも変化しておらず、Sulṭān Muḥammad とデリー市民の反目はダウラターバード遷都の一因と考えられている [IB: 314-315; 家島 5: 126-127; Digby 2004: 347; Jackson 1999: 165]。これらのデリー市民の中核、すなわちサイド、ウラマーといったムスリム・エリートは、カーディーやマリクなどとして政権にも多数参加しており、トゥグルク朝期における古株のデリー市民は複数の政権に仕えた経験を持っていた。彼等に対抗するためにトゥグルク朝のスルターン達が採った政策は遷都だけではなく、Sulṭān Muḥammad は新改宗者や外国人を⁴²⁾ [Digby 2003: 251], Sulṭān Firūz は奴隷を大量に登用することで [Digby 2004: 306, 347], 政権を支える集団にバランスを取ろうと試みた。サルタナト初期の Sayyid Quṭb al-Dīn の例から分かるように、シャイフルイスラームは反政権派デリー市民の中心となりうる立場である。同様に、スーフィーのハーンカーも反政権派の拠点となる恐れがある場所であった [二宮 2003: 15]。殊に、Sulṭān 'Alā al-Dīn 時代を賛美する Nizām al-Dīn Awliyā の後継者たちとそのハーンカーは、トゥグルク朝政権にとっては現政権への反対派の潜在的な中心として警戒すべき対象だったことは想像に難くない⁴³⁾。このような状況の中、デリー市民と距離のあったデリー外のスーフィーをデリーに招き、シャイフルイスラームとしてデリーのスーフィーやハーンカーを管理させる政策は、シャイフルイスラームが反政権派デリー市民の中心になることを防ぐと同時に、反政権派の活動拠点となりうるデリーのハーンカーを監視する、という、サルタナト政権にとって一石二鳥の効果を持つものであったと考えられる。この時期のデリーのシャイフルイスラームは、サルタナト政権のデリー市民対策の一環として機能していたと言えるだろう⁴⁴⁾。

デリーのシャイフルイスラームがデリー市民対策であったという見方は、シャイフルイスラームに著名なスーフィーの子孫が登用されたことの説明にもなる。ハーンカーのワクフやスーフィーの管理はスーフィーでなくとも行えるが⁴⁵⁾、デリーのハーンカーやスーフィーを管理する役職に就く人物として、デリー市民を納得させるためには、デリーを代表するスーフィー Nizām al-Dīn Awliyā やその後継者たちと同程度の権威を持つムルタンやアジョー

42) IB には、Sulṭān Muḥammad が外国人をアミール（マリク）やカーディーとして積極的に登用していた様子が描かれており [IB: 400-02; 家島 5: 319-21], 彼の宮廷にはカーディーやシャイフ、サイド、アミールらと並んでお抱え外国人の席も設けられていた [IB: 222, 233; 家島 5: 54, 64]。Ibn Baṭṭūṭa 自身もデリーのカーディーとしてスルターンに仕えている [IB: 402; 家島 5: 321]。

43) トゥグルク朝期のチシュティヤの伝記に見える、Sulṭān 'Alā al-Dīn への高い評価については Zilli 2003 を参照されたい [Zilli 2003: 70, 90]。

44) デリーの出身者が同地のシャイフルイスラームに任じられず、ムルタンやアジョーダンのスーフィーがデリーのハーンカーを管理していたという状況は、デリーで Nizām al-Dīn Awliyā 支持者によって書かれた SA における、あくなき官職否定の一因だった可能性もある。

45) マムルーク朝でスーフィーやハーンカーを管理していた大シャイフは純粋に行政官であり、就任したのは必ずしもスーフィーではなかった [Escovitz 1984: 209; Fernandes 1988: 53]。

ダンの系譜に属する人々が必要とされたのであろう。同時に、トゥグルク朝政権の権力は、シャイフルイスラームの人選でイニシアティブを取れる程度には強くなっていたという点も指摘できる。政権が変わる毎に登用される系統が変化している点は、政権がそれぞれの方針に合わせて系統を選んでいたことを表すものであろう。Sultān Firūzが、比較的若年であったŞadr al-Dīn Ḥalīmを即位直後にシャイフルイスラーム長にしたのはSultān Muḥammad時代からの明白な路線変更であり⁴⁶⁾、ムルタンのシャイフの登用、すなわちSultān Muḥammad以前の伝統に立ち返るというSultān Firūzの意思表示でもあったのではないかと推察される。このような、サルタナト政権の権力強化と政治目的のスーフィー登用は、ムルタンのシャイフをデリーに呼び寄せたハルジー朝のSultān ‘Alā al-Dīnの時代には既に始まっていたと考えられる。

III サルタナト政権の地方統治とスーフィーの登用

前節ではデリーのシャイフルイスラームの人選を扱ったが、本節ではデリーとは事情が異なる地方のシャイフルイスラームの事例を通して、デリー・サルタナト政権の地方統治とスーフィーの登用について多少の考察を加えたい。

ムルタンのシャイフルイスラームの祖となったのはBahā al-Dīn Zakariyāであるが、彼はNaşir al-Dīn Qubāča (1210-28)の支配下にあったムルタンから、カーディーとともにSultān İltutmişをムルタンの支配者として招く手紙を書いた、という逸話が伝わっている⁴⁷⁾ [FF: 68; Faruqi 1996: 253; Siddiqui 1998: 31]。Bahā al-Dīn Zakariyāが本当に逸話の通りに行動したのかは不明だが、Bahā al-Dīn Zakariyāのデリー政権寄りの姿勢と、Sultān İltutmişが征服後間もないムルタンでBahā al-Dīn Zakariyāをシャイフルイスラームにしたことには関連があると考えられる。

また、一部の地方では、シャイフルイスラームは単なるハーンカーやスーフィーの財政面の管理者に留まらない立場であった。Nizām al-Dīn Awliyāの門弟であったKarīm al-Dīn Samarqandīは、Sultān Muḥammadによってサトガーオンのシャイフルイスラームとワズィールに任じられ、「同地のムスリム達の種々の重大事を、自らの完全なる理性によって厳格な正義の上に執り行った [SA: 307]」とされる。この場合のシャイフルイスラームは、新しい征服地サトガーオンにおいてムスリム共同体の中心になることを期待され

46) 728/1328年のBahrām Aybaの反乱時、Şadr al-Dīn Ḥalīmはまだ10歳程度だったので、1352年には30代半ばから後半である [J’U: 672]。

47) この逸話でのムルタン政権に対するBahā al-Dīn Zakariyāの行動は、先に扱ったデリーのシャイフルイスラームSayyid Quṭb al-Dīnのデリー政権に対する行動と同質のものであり、カーディーが関与している点なども共通している。このようなパターンの逸話は、当時の人々に対して一定のリアリティを持っていたのであろう。

て、同時にワズィールにも任じられたのであろう。シャイフルイスラーム職に限らず、スーフィーがデリー・サルタナト政権によって地方に派遣される際には、政権の所在地であるデリーの代表として、地域のムスリムの中心となりうるという点が重要視されていたと推察される。デリー・チシュティーヤの中心人物で、スーフィー・シャイフとしてデリーの権威を象徴するような立場にあった Nizām al-Dīn Awliyā は、Sultān 'Alā al-Dīn の部下の求めに応じて弟子を地方に派遣したこともあった [Digby 2004: 310]。ムルタンのシャイフのデリー滞在と同様、デリーのシャイフの地方派遣も象徴的な意味を持っていたのである。

おわりに

デリーのシャイフルイスラームの人選において、デリー市民はデリー・サルタナト政権が無視することのできない要素であった。政権の権力が弱かったサルタナト初期においては、政権がデリー市民の意向に沿ってシャイフルイスラームを選出したと考えられる例がある。しかし、ハルジー朝を経てトゥグルク朝期になると状況が変化する。シャイフルイスラームは政権によって、デリー市民やデリーのスーフィー対策に利用されるようになり、ムルタンやアジョーダン出身の権威あるスーフィーがデリーのシャイフルイスラームに登用された。これは、ハルジー朝以降の政権の権力強化によって可能になった政策であった。一方、地方においては、サルタナト政権は支配の強化を目指し、政権に協力的な地元の人物や、政権の所在地デリーの代表となりうる権威ある人物をシャイフルイスラームに選んでいたと考えられる。

デリー・サルタナト政権のスーフィー登用は、当時の社会・政治状況をふまえた政治的意図に基づくものであった。デリー・サルタナト期のシャイフルイスラームの人選からは、サルタナト政権がデリー市民や支配下の地方にどのように対処し、支配を強化していったかを伺い知ることができる。政権はとにかくスーフィーに登用しようとするものであるという前提から一歩進んで、政権が何故、どのようにスーフィーに登用しようとしたか、という点を見直すことは、デリー・サルタナト政権の支配構造のさらなる理解へと繋がるであろう。

参考文献

- AA: 'Abd al-Ḥaqq Dihlawī, *Aḥbār al-aḥīyār*, Delhi, n. d.
 Ā'in: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i akbarī*, vol. 2, ed. H. Blochmann, Calcutta, 1877.
 FF: Amir Ḥasan Sijzī, *Fawā'id al-fu'ad*, Delhi, 1865.
 Futūḥāt: *Futūḥāt-i firūzshāhī*, ed. and tr. Azra Alavi, Delhi, 1996.
 GA: Muḥammad Ġawḥ Šaṭṭārī, *Gulzār-i abrār*, ed. Muhammad Zaki, Patna, 1994.
 IB: Ibn Baṭṭūṭa, *Voyages d'Ibn Batouta*, tome 3, ed. C. Defremery and B. R. Sanguinetti, Paris, 1855.

- IM : 'Ayn al-Mulk 'Abd Allāh b. Māhrū, *Inšā-yi māhrū*, ed. 'Abd al-Rašid, Lahore, 1965.
- J'U : Sayyid Akbar Ḥusaynī, *Jāmi' al-'ulūm*, ed. Qāḍī Sajjād Ḥusayn, Delhi, 1987.
- MA : 'Abd al-Raḥmān Čišṭī, *Mir'āt-i asrār*, Maulana Azad Library, 'Abd al-salam Collection farsi tasawwuf 934/ 29.
- MĤ : Muḥammad Čišṭī, *Majālis al-ḥasanīya*, Asiatic Society of Bengal, PSC 1265; Maulana Azad Library, Sulayman Collection farsi tasawwuf 10/ 2 (122/ 12 内).
- QA : Muḥammad Jamāl Qiwām, *Qiwām al-'aqā'id*, ed. Niṭār Aḥmad Fārūqī. In : *Qand-i Pārsī* 7 (1373 HQ), New Delhi, 1-110.
- SA : Sayyid Muḥammad b. Mubārak Kirmānī (aka Amīr Ḥurd), *Siyar al-awliyā*, Dehli, 1302 AH.
- S'A : Ḥamīd b. Faḍl Jamālī Kanboh, *Siyar al-'arīfin*, John Rylands Library, 115-P-162 (Ali-garh Muslim University, History Department, Rotograph no. 173).
- TFŠa : Šams Sirāj 'Afif, *Tārīḥ-i firūz šāhī*, ed. Wilāyat Ḥusayn, Calcutta, 1888-91.
- TFŠb : Ḍiyā al-Dīn Baranī, *Tārīḥ-i firūz šāhī*, ed. Sayyid Aḥmad Ḥān, Calcutta, 1862.
- TM : Muḥammad Bihmād Ḥānī, *Tārīḥ-i muḥammadi*, British Musium Library, Or. 137 (Ali-garh Muslim University, History Department, Rotograph no. 65).
- TMS : Yahyā b. Aḥmad b. 'Abd Allāh al-Sirhindī, *Tārīḥ-i mubārak šāhī*, ed. Hidāyat Ḥusayn, Calcutta, 1931.
- ṬN : Minhāj Sirāj Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i nāširi*, vol. 1, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Kabul, 1923.
- TSM : Muḥammad Ma'sūm Bakhkhari, *Tārīḥ-i sindh-i ma'sūmī*, ed. 'Umar b. Muḥammad Da'ūd Pūtah, Puna, 1938.
- Mir Ḥusaynī Sādāt, *Ṭarab al-majālis*, Raza Library, Persian 846.
- Faruqi, Z. (1996) *Fawa'id al-Fu'ad : Spiritual and Literary Discourses*, New Delhi.
- Zaki, M. (1972) *Tarikh-i muhammadi by Muhammad Bihmad Khani*, Aligarh.
- Zaki, M. (1981) *Arab Accounts of India during the Fourteenth Century*, Delhi.
- 家島 4 : イブン・バットゥータ著・家島彦一訳注『大旅行記』4, 平凡社, 2000.
- 家島 5 : イブン・バットゥータ著・家島彦一訳注『大旅行記』5, 平凡社, 2000.
- Ando, S. (1994) The Shaykh al-Islām as a Timurid Office. *Islamic Studies* 33 (2-3), 253-80.
- Digby, S. (1990) The Sufi Shaykh and the Sultan : A Conflict of Claims to Authority in Medieval India. *Iran* 28, 71-81.
- Digby, S. (2003) The Sufi Shaikh as a Source of Authority in Medieval India. In : Eaton, R. M. (ed), *India's Islamic Traditions, 711-1750*. New Delhi, 234-62.
- Digby, S. (2004) Before Timur Came : Provincialization of the Delhi Sultanate through the Fourteenth Century. *JESHO* 47 (3), 298-356.
- Eaton, R. M. (2003) The Political and Religious Authority of the Shrine of Baba Farid. In : Eaton, R. M. (ed), *India's Islamic Traditions, 711-1750*. New Delhi, 263-84.

- Ernst, C. W. & Lawrence, B. B. (2002) *Sufi Martyrs of Love: The Chishti Order in South Asia and Beyond*. New York.
- Escovitz, J. H. (1984) *The Office of Qādī al-quḍāt in Cairo under the Bahri Mamlūks*. Berlin.
- Farooqi, N. R. (2003 a) The Early Chishti Sufis of India (1). *IC 77* (1), 1–30.
- Farooqi, N. R. (2003 b) The Early Chishti Sufis of India (2). *IC 77* (2), 1–34.
- Fernandes, L. (1988) *The Evolution of a Sufi Institution in Mamluk Egypt: The Khanqah*. Berlin.
- Habib, M. and Nizami, K. A. (eds) (1992) *A Comprehensive History of India*, vol. 5, part 1 (2nd ed.). New Delhi.
- Hardy, P. (1997) *Historians of Medieval India* (Reprint). New Delhi.
- Islam, R. (2002) *Sufism in South Asia: Impact on Fourteenth Century Muslim Society*. Karachi.
- Jackson, Peter (1999) *The Delhi Sultanate: A Political and Military History*. Cambridge.
- Khan, A. N. (1983) *Multan: History and Architecture*. Islamabad.
- Kramer, J. H. Shaykh al-Islām. *EP*².
- Kumar, S. (2000) Assertions of Authority: A Study of the Discursive Statements of Two Sultans of Delhi. In: Alam, M., Delvoye, F., Gaborieau, M. (eds), *The Making of Indo-Persian Culture: Indian and French Studies*. New Delhi, 37–66.
- Ninomiya A. (2006) History of the House of Baha al-Din in the Delhi Sultanate Period. In: Habib, I. (ed), *Papers from Aligarh Hisotrians Society: Indian History Congress 66th Session*. Aligarh, 189–97.
- Nizami, K. A. (2002) *Religion and Politics in India During the Thirteenth Century*. New Delhi.
- Qureshi, I. H. (1958) *The Administration of the Sultanate of Dehli*. Karachi.
- Rizvi, S. A. A. (1983 a) *A History of Sufism in India*, vol. 1. New Delhi.
- Rizvi, S. A. A. (1983 b) *A History of Sufism in India*, vol. 2. New Delhi.
- Siddiqui, I. H. (1998) Shaikh Bahauddin Zakarya Suhrawardi and his Successors. In: Ahmad, N. and Siddiqui, I. H. (eds), *Islamic Heritage in South Asian Subcontinent*, vol. 1. Jaipur, 19–45.
- Zilli, I. A. (1998) Chishtis and The State: A Case Study of Shaikh Nizamuddin Aulia's Relations with the Khalji Sultans. In: Ahmad, N. and Siddiqui, I. H. (eds), *Islamic Heritage in South Asian Subcontinent*, vol. 1. Jaipur, 46–59.
- Zilli, I. A. (2003) Early Chishtis and the State. In: Anup Taneja (ed), *Sufi Cults and the Evolution of Medieval Indian Culture*. New Delhi, 54–108.
- 安藤志朗 (1994) 王朝支配とスーフィー『西南アジア研究』41, 1–20.
- 荒松雄 (1989) 『中世インドの権力と宗教』岩波書店.
- 二宮文子 (2003) デリー・サルタナト期のスーフィー・シャイフ『西南アジア研究』59, 1–22.